

未婚女性のライフコース展望の長期的趨勢

Long-term Trends in Female Life Course Expectations

余田翔平（国立社会保障・人口問題研究所）

Shohei Yoda (National Institute of Population and Social Security Research)

yoda-shouhei@ipss.go.jp

1. 問題の所在と研究目的

就業や家族形成をめぐる女性がいかなる選好と予期を抱いているのかを明らかにすることは、今後の女性のライフコースの変化を見通すうえでも重要である。なぜならば、そうした意識は、女性が社会全体の就業や家族形成のありようを認識する際のフィルターであり、かつ実際のライフコース選択も強く規定することが予想されるためである。

岩澤（1999）は国立社会保障・人口問題研究所の「出生動向基本調査」の独身者調査のデータを用いて、1987年から1997年の10年間に、未婚女性が理想とするライフコースと予想するライフコースとが一致している割合は高まりつつあるものの、それでもなお3分の2の未婚女性が理想とは異なる将来を描いていることを示した。このことは、少なくとも1990年代後半まで、多くの未婚女性がライフコースの「理想」と「予想」との間にギャップを抱えていたことを意味している。本研究では、同調査の最新の調査回（2015年）までのデータの集計結果を加えることで、過去およそ30年間の未婚女性の意識の動向を明らかにする。

2. データ

国立社会保障・人口問題研究所が実施する「出生動向基本調査」では、第9回調査（1987年）以降、調査対象の独身女性に対し、理想のライフコース（ideal life course）と、自身が現実に辿ると予想するライフコース（anticipated life course）をたずねている。具体的には、5つの選択肢—（1）「結婚せずに就業を継続する」（非婚）、（2）「結婚するが子どもを持たずに就業継続する」（DINKS）、（3）「子どもをもち、就業も継続する」（両立）、（4）「出産・子育て時に就業をやめ、その後再就職する」（再就職）、（5）「子育てに専念し、以後就業しない」（専業主婦）—を挙げ、最も近いものを1つ選択する形式をとっている。

3. 結果

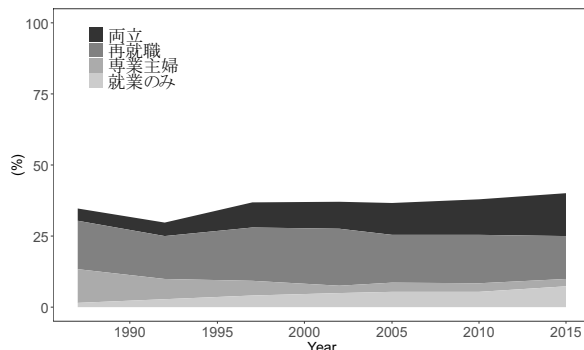


図1. 理想／予想ライフコースの一致率

図1は、「理想」と「予想」のライフコースが一致している未婚女性（18～24歳）の割合である。2000年代初頭には約4割程度にまで増加しているが、その後は明確な増加傾向は見られない。報告当日は、理想／予想ライフコースの周辺分布の変化に加え、両者の連関パターンの分析結果を示す。

【文献】岩澤美帆, 1999, 「だれが『両立』を断念しているのか—未婚女性によるライフコース予測の分析—」『人口問題研究』55(4), pp.16-37.